「今日の説教、聴き手のために」　2009/9/20　明治学院教会（167）

「死にあずかるバプテスマ」　岩井健作牧師

ローマの信徒への手紙　６章１節－１１節

1、Ｏ夫人の、受洗の時の言葉はいつまでも心に残っている。「私宗教なんかに縁のない人間だと今まで思っていたのです。でも、不思議ですね」。ご子息が知的障害を負っていた。身辺自立と軽作業が出来るまでにどれだけの苦労があったであろう。夫人は、もし自分が先立つようなことがあったら、と思うとその子が不憫で堪らないと言い続けてきた。ふとした動機で教会に通い、その重さから自由への旅立ちを経験した。聖書を通じてのイエスとの出会いがそれをもたらしたという。日常の重さは変わらないのに、笑顔が明るかった。

2、パウロはバプテスマ（洗礼）について、「キリストの死にあずかるバプテスマ」（ローマ６：３）と言い、「わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのであり」（同４）と続ける。「死にあずかる」とは自分本位、自己充足、自己実現、自己完結などといった「おのれ」に「死ぬ」ことを意味している。しかし、人間はそうたやすく実存的な意味での「おのれの死」を経験出来ない。その自分が「キリストの死」に結び合わされて、初めて「その死」と繋がることができる恵みがそこに記されている。Ｏ夫人の、自分が何とかしなければならないという「自己完結」は「己の保持」であった。「その自分」に死ぬことは出来なかった、という。子息のＫ君の不憫さは、同時に親の責任となり重くのし掛かった。自由がなかった。けれども子息Ｋ君は、彼は彼で、ヨハネ福音書９章が語っているように「神の栄光」を表すために存在しているのだ。このことに気がつかされた時、ふと肩から力がぬけたという。十字架上の何も出来ないで死んだ無力なイエスの存在が、無力でよいのだ促している。「彼の死に結び付いて死の様に等しくなるなら、さらに彼の復活の様に等しくなるであろう」（５節）との言葉が力をもったと言う。Ｋ君に対してなにも出来ない自分でよいのだ。それは現実の受容であった。

3、「儀礼や、教義や、制度としての宗教を否定する」宗教思想史家笠原芳光さんも、宗教は、人間の最終的問題だという。それは常に己の死を問題にして、そこから生きることが問題だからである。洗礼が死ぬことに関係があるのは、古典的な恵みの徴であり、その形態であろう。ある意味では「肉体の死」までを相対化する「死」が、パウロのいう「キリストの死にあずかる」ことである。「主にありでぞ　死を迎えん　主にある死こそはいのちなれば。　生くるも良し　死もまたよし、主にある恵みに　変わりはなし」は讃美歌２１－５１８）。これは、パウロのフィリピの信徒への手紙１章２１節の気持ちを歌った歌である。一方で、「ひたすら走る」（フィリピ３章１４節）ことを強調するパウロの、もう一方のたたずまいであり、ポートレート（肖像画）であろう。決して悟りではない。走る姿は今日も、明日も変わらない。

4、今日の[redacted]さんの洗礼式をみんなで祝福したい。